

< 翻 訳 >

叙事詩の宗教哲学 —Mokṣadharmā-parvan 和訳研究 (LXVIII)¹—

茂木 秀 淳 元信州大学教育学部

キーワード： ナーラーヤナ，サートヴァタ，パンチャラートラ，多数のプルシャ

[336 章] (B.348 章, C.13547-13636, K.358 章) (ナーラーヤナ章 (16) サートヴァタ・ダルマの相承)

ジャナメージャヤは言った。

- (1) おお実に，至尊なるハリは，すべての専一者たちに喜びます。至尊者は，規範にかなった礼拝を自ら受け入れるのです (gr̥hṇāti)。
- (2) この世において薪を焼き尽くし²，善悪を離れた人々に対して，あなたは，順次継承された道を示しました。
- (3) 人々は，第四の道において最高のプルシャに至ります³。しかし，専一に信仰する人々は，(直接) 最高の場所に至るのであります。
- (4) 確かにこの専一者の教義は⁴，最高であり，ナーラーヤナの好むところであります。三つの道を行くことなく⁵，不滅のハリに至るのですから。
- (5) ウパニシャッドと共にもろもろのヴェーダに正しく立って，規則どおりに (ヴェーダを) 唱えるバラモンたち，そして苦行者の規範を保つ人々 (yatidharminah) ，

¹本稿は『叙事詩の宗教哲学— Mokṣadharmā-parvan 和訳研究 (LXVII)—』(信州大学教育学部研究紀論集第 13 号) に続くものである。略号などは前稿に準ずる。なお本稿で用いる主なものは下記のとおりである。

- Hopkins[1901]: E.W.Hopkins, "Yoga-technique in the Great Epic", JAOS. vol.22, 1901, pp.333-379.
- Hopkins[1915]: E.W.Hopkins, Epic Mythology, First Edition: Strassburg, 1915, Reprint: Delhi 1974.
- Edgerton[1965]: F.Edgerton, The Beginnings of Indian Philosophy, London, 1965.
- Gonda[1970]: J.Gonda, Viṣṇuism and Śivaism, A comparison, London, 1970.
- Esnoul[1979]: A.Esnoul, Nārāyaṇīya Parvan du Mahābhārata, Paris, 1979.
- Matsubara[1994]: Nitsunori Matsubara, Pāncarātra Saṃhitās and Early Vaiṣṇava Theology, 1994, Delhi.
- 松原 [1995]: 松原光法「中期パンチャラートラ聖典の成立年代」東方学 No.90, 平成 7 年 7 月, pp.136-120.

²dagdhendhanā Ca. dagdhendhanānalavat praśāntāḥ / ((dagdhendhanā とは) 薪を焼いた火のように，静まった者たちは，という意味である) Cn. naṣṭavāsanāḥ / (潜在力を滅した者たちは，という意味である) Cp. bhagavadarpitakarmānuṣṭhātārāḥ / (至尊者によって定められた行為を行う者たちは，という意味である)

³catrurthyāṃ caiva te gatyāṃ gacchanti puruṣottamam Ca. aniruddhapradymnasamkarṣaṇagatis trisro 'tikramya bhagavad-vāsudevārūpāyāṃ gatyāṃ / (アニルツダ，ブラドユムナ，サンカンルシャナの道という三つを超えて，至尊のヴァースデーヴァの姿をした gatyāṃ 道において，という意味である) Cp. puruṣottamam, puruṣottamākhyam akṣarātītaṃ brahma / (puruṣottamam とは，最高のプルシャという名の，不滅を超えたブラフマンである) Cf.Matsubara[1994]: the profound relationship between *puruṣa* and *puruṣottama*, in alliterative word play, ... *puruṣottam* / ... *puruṣā gacchanti*, p.79.13.

⁴ekāntadharmo 'yaṃ Cf.Matsubara[1994]: Nārāyaṇa, connected with *dharma*, p.130.7.

⁵agatvā gatayas tisro Cf.Oberlies[Grammar]: *gatayas*, forms in *-ayaḥ* are used as Ac.pl, p.61.5. Cf.MBh.XII.220.37.

- (6) 彼らよりも、専一に信仰する人々の道はすぐれていることを私は知っています。この教義 (dharma) は、誰によって語られたのですか。神によってですか、あるいは聖仙によってですか⁶。
- (7) 専一に信仰する者たちの行為はどのようなものですか。またそれはいつ始まったのですか、威力ある方よ。このような私の疑問を断ち切って下さい。私の好奇心は大変に大きいのです。

ヴァイシャンパーヤナは言った。

- (8) クル族とパーンダヴァ族との戦いにおいて、もろもろの軍の準備が整った時⁷、意気消沈したアルジュナに対して、至尊者は自ら詠じた⁸。
- (9) 「以前、余はそなたに対し、(生き物の) 去来を⁹ 語った。この教え (dharma) は奥深く、未熟者たちには認識するのが難しい。」
- (10) サーマ・ヴェーダに合致する¹⁰ この教えは、かつて最初のユガ期に創造され、支配神であるナーラーヤナ自身によって保持されたのである、王よ¹¹。
- (11) このことを大幸運のナーラダは、聖仙たちのいる中で、そしてクリシュナとビーシュマが聞いている時、プリターの息子 (ユディシュティラ) によって尋ねられたのである、偉大な王よ。(Cf.MBh.XII.334.12, 336.60)
- (12) このことは、私の師 (ヴィヤーサ) も (私に) 話された、すぐれた王よ。その時ナーラダが (師に) 語った通りに (これから語るのを) 聞くがよい。
- (13) (ナーラーヤナの) 心に生じたブラフマー神が (mānasaṃ janma) ナーラーヤナの口から出てきた時、大地の守護者よ、ナーラーヤナは自ら、その教えに従って、神々と祖霊の供養を行ったのである、パーラタ族の者よ。
- (14) 泡を飲む聖仙たち (phenapā ṛṣayaḥ) もまた、その教えを獲得した。ヴァイカーナサ派の人々は、泡を飲む聖仙たちからその教えを獲得した。ソーマは、ヴァイカーナサ派の人々から (獲得した)。しかしその後その教えは再び消えたのである¹²。

⁶deven ṛṣiṅāpi vā Sandhi irregular: *devena ṛṣiṅāpi* Cf.Oberlies[Grammar]: 1.1.2. Absence of *praśiṣṭa-sandhi*, 1.1.2.3. -a/ā r-, p.9.12.

⁷samupoḍheṣv anīkeṣu Cs. samupoḍheṣu, vyūharacanayaikābhūteṣu / (samupoḍheṣu とは、(もろもろの軍が) 軍勢の配置として一体となった時に、という意味である)

⁸gītā bhagavatā svayam Cf.Hopkins[Great Epic]: Gītā is a recitation by the Lord, p.53, fn.1

⁹P.,K.: āgatiś ca gatiś caiva B. agatiś ca gatiś ca Cn. agatir gatiśūnyo jñānadharmaḥ / gatir gatimān upāsanādharmāḥ / (agatiḥ とは, gati 行為を欠いた, 知識の教えである。gatiḥ とは, 行為を伴う, 念想の教えである) Cs. a[ā?][gatiś ca gatiś caiva, āvirbhāvas tirobhāvas ca / (āgatiś ca gatiś caiva とは, 顕現と消滅を、という意味である)

¹⁰saṃmitaḥ sāmavedena Cn. sāmavedoktaṃ tat tvam asīti vākyam yathādhikāriṅaḥ sadyojñānanakanam evaṃ vaiṣṇavadharmo 'pi śamādimatāṃ sadyaḥkaivalyahetur ity arthaḥ / (サーマ・ヴェーダに言われている「汝はそれである」という文章は、ふさわしい人々にとって、直ちに知識を引き起こすものであると同様に、ヴァイシュナヴァの教えもまた、寂靜等をもつ人々にとって、即座の解脱の原因である、という意味である) Cs. pūrvam eva bhagavān imaṃ vaidikaṃ dharmam svayam evādhyāpayatī āha—saṃmitam iti / (かつて至尊者は、このヴェーダに由来する教えを自ら教えたので、saṃmitam 合致する、と言われたのである)

¹¹svayam īśena rājan nārāyaṇena ha Cn. īśena mahādevena / (īśena とは, マハーデーヴァによって、という意味である)

¹²tataḥ so 'ntardadhe punaḥ Cs. tataḥ so 'ntardadhe, brahmapralaye bhagavatī evāyam dharmāḥ pralīyate ity arthaḥ / (tataḥ so 'ntardadhe とは, ブラフマー神が至尊者の中に滅する時、このダルマは滅する、という意味である)

- (15) 王よ、ブラフマー神の、第二の(ナーラーヤナの)目からの誕生があった時、(ブラフマー神は)祖父であるソーマからこのダルマを知った¹³。そして(ブラフマー神は)ナーラーヤナを本性とする¹⁴このダルマを、王よ、ルドラに与えたのである。
- (16) それからヨーガに従事するルドラは、かつてクリタ・ユガ期に、王よ、親指大のヴァーラクリヤ仙たち(vālakṛīyān ṛṣīn)すべてにこのダルマを語った。それからまたかの神(ナーラーヤナ)の幻術によって(そのダルマは)消えたのである。
- (17) ブラフマー神の偉大な第三の誕生が(ナーラーヤナの)言葉からあった時¹⁵、このダルマはナーラーヤナ自身から生じたのである、王よ。
- (18) スバルナという名の聖仙が、よく実行された苦行、克己(dama)、そして自制(niyama)によって、このダルマを最高のプルシャから獲得した。
- (19) スバルナは、この最高のダルマを一日三回行ったので¹⁶、そのため世間ではこの誓約は「三度のスバルナの儀礼」(Trisauparna)と言われている。
- (20) リグ・ヴェーダの章句に述べられた¹⁷この誓約は実行するのが困難である。そしてスバルナから、この永遠のダルマは、(風によって)獲得され、
- (21) 世界の生命である風によって、広められたのである、二本足の者たちの中ですぐれた者よ。そして風から直接に、(供物の)残余を食べる聖仙たちが¹⁸(このダルマを)獲得した。
- (22) 彼らから大海がこの最高のダルマを獲得した。すると再び、このナーラーヤナによって確立されたダルマは消えたのである¹⁹。
- (23) その時再び、偉大なブラフマー神の、(ナーラーヤナの)耳から生まれた創造があったのである、人の中の虎よ、それについて語られていることを聞くがよい。
- (24) 力強き²⁰神ハリ、すなわちナーラーヤナは自ら世界を創造しようという意欲をもって、世界創造を行うプルシャについて思案した。
- (25) すると思案している彼の両耳からプルシャが生まれた。それが生き物の創造を行うブラフマー神である。世界の支配者(ナーラーヤナ)は彼に言った。

¹³P. pitāmahāt somād etaṃ dharmam ajānata B.,K.: pitāmahenaiva somād dharmāḥ pariśrutāḥ Cs. somād, aniruddhāt / (somāt とは、アニルツダから、という意味である)

¹⁴P. nārāyaṇātmaḥ B.,K.: nārāyaṇātma

¹⁵yadāsīd vācikaḥ mahat Cn. vācikaḥ, vānnivartyamantrārthacintanapūrvakam / (vācikaḥ とは、言葉によって蘇生すべきマントラの意味の考察を前提にして、という意味である)

¹⁶triḥ praikrāntavān Cn. triḥ praikrāntavān, trīr āvartitavān / pratyaham iti śeṣaḥ / (triḥ praikrāntavān とは、三回繰り返した、という意味であり、毎日、と補われるべきである) Cs. trīr adhitavān, pratyaham trīr anuṣṭhitavān / (三回学んだ、すなわち、毎日三回実行した、という意味である)

¹⁷ṛgvedapāṭhapaṭhitam Ṛgveda X.114.3-5 が、Trisuparna 讃歌として知られている。

¹⁸ca ṛṣibhir vighasāsībhiḥ Sandhi irregular: ca ṛṣibhir Cf. Oberlies[Grammar]: 1.1.2. Absence of praśliṣṭa-sandhi, 1.1.2.3. -a/ā r-, p.9.12.

¹⁹P. tataḥ so 'ntardadhe bhūyo B.,K.: antardadhe tato bhūyo

²⁰P. prabhuḥ B.,K.: prabhum (B.,K. の読みでは、プルシャを形容することになる)

- (26) 「息子よ、あらゆる生き物を、口から、そして足から創造せよ。余はそなたに幸運と力と活力を与えるであろう、よく誓いを守る者よ。
- (27) サートヴァタという名のダルマを余から受け取るがよい。それによってクリタ・ユガ期の一切を²¹規定通りに確立せしめよ。」
- (28) それからブラフマー神はハリメーダス神に²²敬礼した。そして彼は、奥儀、綱要書と共に²³、そして森林書と共に、ナーラーヤナの口から生じた最上のダルマを、受け取ったのである。(Cf.MBh.XII.336.50)
- (29) それから、量り知れない活力をもつブラフマー神に「願望なき行為」と名づけられる²⁴、クリタ・ユガ期の特質をもつ²⁵ダルマを教示した後で、(ナーラーヤナは)目に見えない状態が広がっている暗闇の彼方へ去った。
- (30) それからブラフマンの世界の祖父であり²⁶、恩寵を与える神(ブラフマー神)は、動くもの・動くぬものからなるすべての世界を創造したのである。
- (31) そしてその時最初に²⁷、清浄なクリタ・ユガ期が始まったのである。なぜならばその時サートヴァタのダルマが、もろもろの世界に行き渡り、確固としていたからである。
- (32) その最初のダルマによって世界を創造するブラフマー神は、神の支配者、力強きハリ、すなわちナーラーヤナを礼拝した。
- (33) その時、(ブラフマー神は)ダルマを基礎づけるために、もろもろの世界の安寧を望んで、マヌ・スヴァーローチシャに、(ダルマを)教示した。
- (34) その後、すべての世界の王であり、不動にして威光あるスヴァーローチシャは、まもなく(purā)自分の息子のシャンカパダに(ダルマを)教えたのである、王よ。
- (35) そしてシャンカパダもまた自分の実の息子、方位の守護者スダルマンに²⁸教えたのである、パラタ族の者よ。そして、トレーター・ユガ期になると、そのダルマは再び消滅した。
- (36) かつてブラフマー神が(ナーラーヤナの)鼻から誕生した時に²⁹、最高の王よ、ブラフマー神の見える前で、蓮の目をした力強き神ハリ、すなわちナーラーヤナは自らこのダルマを声に出した³⁰。

²¹P. sarvaṃ kṛtayugaṃ B.,K.: sṛṣṭaṃ kṛtayugaṃ

²²devāya harimedhase Cs. harimedhase, harim indram, edhayaṭīti harimedhās tasmai / amāgamaś chāndasaḥ / (cf.Pāṇini 6.3.67-69) (harimedhase とは, harim, すなわち, インドラを, 増大させるので, ハリメーダスと言われる。その彼に, という意味である。(harim と) 対格語尾を付加するのは古形である)

²³sarahaṣyaṃ sasamsargam Cs. saṃgraho nāma nityānuṣṭhānakramopadeśaparo granthaviśeṣaḥ / (saṃgrahaḥ 綱要書とは, 常に行為の順序の教示を目的とする, 特別な書物である)

²⁴nirāśīḥkarmasamjñitam Cs. nirāśīḥkarmasamjñitam, kṣudrasvargaśūputrādyaśaktirahitam / (nirāśīḥkarmasamjñitam とは, 小さなもの, 天界, 獣, 息子などへの執着のない, という意味である)

²⁵P.,K.: taṃ kṛtayugadharmāṇaṃ B. tvaṃ kartā yugadharmāṇāṃ Cs. kṛtayugadharmāṇaṃ, kṛtayugasambandhisvabhāvam / (kṛtayugadharmāṇaṃ とは, クリタ・ユガ期に関する性質をもつ, という意味である)

²⁶P. brahmalokapitāmahaḥ B.,K.: brahmā lokapitāmahaḥ B.,K. では創造者はブラフマー神であることが明示されている。

²⁷tadā ādau Sandhi irregular: tadā ādau Cf.Oberlies[Grammar]: 1.1.1. Absence of savarna-sandhi, 1.1.1.1. -a/ā a/ā-, p.2.11.

²⁸P.,K.: sudharmāṇam B. suvarṇābham

²⁹P. nāsikyajanmani B.,K.: nāsatyē janmani

³⁰P. ujjagārāvindākṣo B.,K.: taj jagādāravindākṣo

- (37) 至尊のサナトクマールが、彼(ブラフマー神)から(そのダルマを)学んだ。またサナトクマールから、造物主ヴィーラナがクリタ・ユガ期の最初に、クル族の虎よ、このダルマを学んだ。
- (38) ヴィーラナもまた学んだ後、マヌ・ラウチュヤに³¹このダルマを与えた。ラウチュヤは³²清浄にして、よく誓約を守り、賢明な息子に、
- (39) すなわち、ククシという名の、諸方位の守護者である有徳の息子に、与えたのである。そして再び、ナーラーヤナの口から生じた³³このダルマは消えた。
- (40) そしてブラフマー神が、ハリという母胎のために(hariyonaye)卵生として誕生した時、このダルマは再びナーラーヤナの口から生じたのである。
- (41) (このダルマは)ブラフマー神によって受け取られ、規定通りに実行された。そしてバルヒシャド(Barhiṣad 祭壇の敷草の上に座った)という名の聖者たちが³⁴(ブラフマー神によってこのダルマを)教示されたのである、王よ。
- (42) バルヒシャドたちからサーマ・ヴェーダに通曉したジェーシュタ(Jyeṣṭha 最尊)という名の有名な再生族に伝えられた。(このために)ハリはジェーシュタ・サーマン(を詠うこと)を誓約としている。
- (43) (このダルマは)ジェーシュタからさらにアヴィカンパナ王に到達した。それから、王よ、力強いハリのこのダルマは消えたのである。
- (44) ブラフマー神の第七の誕生が³⁵蓮より生じた時、このダルマは実にナーラーヤナ自身によって語られたのである、王よ。
- (45) (ドゥパーパラ)ユガ期の最初に、世界を維持する清浄な祖父に対して(語られたのである)。そして祖父はかつてこのダルマをダクシャに与えた。
- (46) それからダクシャは、娘の息子の最年長者に、すなわちサヴィトリの最年長の息子アーディトヤに、与えたのである、最高の王よ。彼(アーディトヤ)からヴィヴァスヴァットが受け取った。
- (47) トレーター・ユガ期の最初に、再びヴィヴァスヴァットは(このダルマを)マヌに与えた。そしてマヌは、世界の繁栄のために息子のイクシュヴァークに与えたのである。(Cf.BhG.4.1)
- (48) このダルマはイクシュヴァークによって語られ、もろもろの世界に行き渡って、確立した。そして、(もろもろの世界の)滅盡の時、再びナーラーヤナに戻るであろう、王よ。

³¹P. raucyāya manave B.,K.: raibhyāya munaye

³²P. raucyaḥ B.,K.: raibhyaḥ

³³P. nārāyaṇamukhodgataḥ B. nārāyaṇamukhodbhavaḥ

³⁴munayo nāmnā barhiṣado nṛpa Cf.Oberlies[Grammar]: 3.19. Transfer of stem: °i-stem ← °is-stem, *barhiṣado*, p.96.14. Also this might be a case of the sandhi -s- < -s + s-, p.96, fn.7.

³⁵yad idam saptamaṃ janma Cn. saptamam, antaryāmīrūpaṃ janma / idam eva gītāyām uktaṃ (MBh.VI.26.1=BhG.4.1) praty-abhijñānārtham / (saptamam とは、内制者の姿をした誕生である。idam このことは、ギターで言われたことの再認識のためである)

- (49) 誓約を守る者たちにとっての³⁶ ダルマもまた、かつて『ハリ・ギター』の中で³⁷、簡潔な方法で編集され、そなたに語られたのである、最高の王よ。
- (50) しかし、このダルマは、ナーラダには、奥儀と綱要書と共に、世界の守護者ナーラーヤナから直接伝えられたのである、王よ。(Cf.MBh.XII.336.28)
- (51) このようにこの偉大な、原初の永遠のダルマは、王よ、認識しがたく、行なうに難しいものであるが、サートヴァタの者たちによって (sātvatair) 常に保持されているのである。
- (52) このダルマの知識によって、そして正しく実行され、不殺生のダルマと結びついた行為によって³⁸、自在神ハリは喜ぶのである。
- (53) (ハリは)、一つの顕現 (vyūha) を構成部分とする者として、あるいはあるところでは、二つの顕現をもつ者として知られている。そして三つの顕現をもつ者としても知られ、四つの顕現をもつ者としても現われるのである³⁹。
- (54) ハリこそは、所有意識なく (nirmama) 部分をもたない知田者 (kṣetrajña) であり、あらゆる生き物における五元素の性質を超えた命我 (jīva) であり、
- (55) (生き物の中に) 広がっている五つの感官を動かす心 (manas) である⁴⁰、王よ。このハリは、聡明な世界の蔵であり⁴¹、世界の創造者である。
- (56) この不動のプルシャは、非行為者であり⁴²、行為者であり、結果であり、原因である。彼は望むがままに遊ぶのである (krīdate)), 王よ。
- (57) 未熟な者たちによっては認識するのが難しいこの専一者のダルマを、私は師としての恩寵によって、そなたに語ったのである、最高の王よ。専一に信仰する人々は、数多くは得られないのである、王よ。

³⁶P. vratinām B.,K.: yatīnām Cf.Critical Notes; *yatīnām*, countenanced only by Bom. and Cal.ed and a few sporadic MSS, so that the argument that BhG.(=Harigītā) teaches the *yatīdharma* loses almost all its support, p.2231(right), v.49.

³⁷kathito harigītāsu Cf.MBh.XII.334.8, in the footnote referring to the variant readings of B.,K.; Hopkins[Great Epic]: the last case, gāthās recited by a divinity, is found in the Harigītās (plural), that is the Bhagavad Gītā (Upanishad), p.53.2)

³⁸ahimsādharmayuktena Cf.Matsubara[1994]: *ahimsā*, one of the most important teachings in the Pāñcarātra, p.147, Reference No.38.

³⁹caturvyūhas ca dṛśyate Ca. kadācid ekam eva vyūhaṃ śrīvāsudevākhyam āśritya sargaṃ kurute, kadācit saṃkarṣākhyādivītyavyūhasahitaḥ kadācit pradyumnākhyatṛīyavyūhasahitaḥ kadācid aniruddhākhyacaturthavyūhasahita itī nānāprakārasargadarśanaṃ purāṇādaḥ na viruddham itī bhāvaḥ / (ある時は、聖なるヴァースデーヴァと言われる一つの顕現に依存して、創造を行なう。ある時は、サンカルシャナと言われる第二の顕現を伴い、ある時は、ブラドユムナと言われる第三の顕現を伴い、ある時はアニルツダと言われる第四の顕現を伴って (創造を行なう) というように、多数の種類の創造が見られることは、ブラーナなどとは対立しない、という意味である)

Cn. atrāniruddhaś catuṣṭayānugataḥ, pradyumnaś tritayānugataḥ, saṃkarṣaṇo dvitayānugato vāsudeva eka eva / etad eva vyutkrameṇātroktam / (ここでは、アニルツダは四種に随伴し、ブラドユムナは三種に随伴し、サンカルシャナは二種に随伴し、ヴァースデーヴァは単一である、とこのように逆の順序によって述べられているのである) Cf.Matsubara[1994]: the term *Vyūha*, p.120.3.

⁴⁰manaś ca prathitaṃ Cn. manaś ca, cād ahaṃkāro 'pi harir evety anvayaḥ / (manaś ca の、ca の語によって、自我意識もまたハリに他ならない、ということが随伴する)

⁴¹P. lokanidhir dhīmān B. lokavidhir dhīmān K. lokanidhiḥ śrīmān

⁴²akartā Cp. akartā, saṃhartā / (akartā とは、帰滅させる者である、という意味である)

- (58) もし、不殺生を行ない、自分を知り、あらゆる生き物の幸福に喜び、願望による行為をもたない⁴³ 専一に信仰する人々によって、世界が満たされるならば、クル族の息子よ、クリタ・ユガ期が到来することになる⁴⁴。
- (59) ダルマを知り、最高のバラモンである至尊の我が師ヴィヤーサは、ダルマの王(ユディシュティラ)にこのように語ったのである、人々の王よ。
- (60) かつて聖仙たちの眼前で、そしてクリシュナとビーシュマが聞いている時、偉大な苦行者ナーラダは、彼(ユディシュティラ)に対しても(次のように)語ったのである、王よ。(Cf.MBh.XII.336.11)
- (61) 「月のごとき光をもつ白く不動の最高の神ブラフマン、そこにナーラーヤナに専念する専一に信仰する者たちは赴くのである⁴⁵。」

ジャナメージャヤは言った。

- (62) なぜ他のバラモンたちは、さまざまな誓約は行なうのに、賢者たちによって (pratibuddhair) 行われた、このように多種類のダルマを行なわないのですか。

ヴァイシャンパーヤナは言った。

- (63) 身体と結合した者たちには⁴⁶ 三種の質量因 (prakṛtayaḥ) が創造されている、王よ。サットヴァ的な質量因、ラジャス的な質量因、タマス的な質量因である、パーラタ族よ。
- (64) 身体と結合した者たちの中で、クル族の子孫よ、すぐれた人はサットヴァ的であり、解脱という目的が定まっているであろう、虎のごとき人よ。
- (65) そのすぐれた人は、この世においても、ブラフマンの中にいるプルシャを⁴⁷ 認識する。解脱は、ナーラーヤナを目標とする。それ故、(そのすぐれた人は) サットヴァ的であると伝えられている。
- (66) 専一の信愛をもつ者は、常にナーラーヤナを最終目標として、最高のプルシャを思念しつつ、望んだものに (manīṣitaṃ) 達するのである。
- (67) 願望をもち (manīṣino)、解脱を求める苦行者たちが渴愛を断ち切った時、ハりは彼らに安穩をもたらすのである (yogakṣemavahaḥ)。
- (68) 誕生する人をマドゥスーダナが見るならば⁴⁸、その人はサットヴァ的であり、必ず解脱すると、と知られるべきである。

⁴³P. āśīḥkarmavivarjitaiḥ B.,K.: āśīḥkarmavivarjitā B.,K. の読みでは、この語は直前の主格 *kṛtayaḥ* を修飾することになる。

⁴⁴bhavit kṛtayaḥ Cf.Hopkins[1915]: the absence of animal sacrifice is a sure mark of the Kṛta age, p.217.24; Matsubara[1994]: *ahiṃsā*, p.147, Reference No.38.

⁴⁵K. はこの後に次の 1 行を挿入している。(=MBh.XII.900*)

taḍ eva paramaṃ (900*: kevalaṃ) sthānaṃ muktānāṃ kevalaṃ (900*: paramaṃ) bhavet /

(それは解脱した者たちにとって最高にして唯一の場所となる。)

⁴⁶dehabandheṣu Cp. dehabandheṣu, dehabandhāḥ jīvaḥ, teṣu / (身体と結合した者たちとは、もろもろの命我であり、dehabandheṣu, 彼ら(命我たち)においては、という意味である)

⁴⁷P. puruṣaṃ brahmavartinam B.,K.: puruṣaṃ brahmavittamam

⁴⁸paśyen madhusūdanaḥ Cn. paśyet, kṛpayeti śeṣaḥ / (paśyet は、慈悲によって(見る)、と補われるべきである)

- (69) 専一の信仰によって実行されたダルマは⁴⁹、サーンキヤ・ヨーガと等しい。それ故、ナーラーヤナを本質とする解脱において⁵⁰、(専一の信仰者たちは)最高の道に赴くのである。
- (70) 人は、ナーラーヤナ神によって見られると、目覚めた者となるであろう。このように、自分の願望(のみ)によっては、目覚めた者は誕生しないのである、王よ。
- (71) ラジャス的な質量因とタマス的な質量因とは、混合した質量因であると伝えられている。それを本質とする人が生まれても、もろもろの行為の特徴と結びついているその人を、ハリは自ら見ることはないのである、人々の王よ。
- (72) このラジャスとタマスによって覆われた人の⁵¹誕生は、世界の祖父ブラフマー神が見るのである。
- (73) 実に、神々と聖仙たちは⁵² サットヴァの中にいるのである、最高の王よ。微細なサットヴァを欠いた者たちは、そのために「変化する者たち」⁵³と言われる。

ジャナメージャヤは言った。

- (74) 変化する者は、どのようにして最高のプルシャに至ることができるのですか⁵⁴。

ヴァイシャンパーヤナは言った。

- (75) 人は(puruṣaḥ)、行為を離れるならば(niṣkriyaḥ)、極めて微細なサットヴァを具え⁵⁵、三つの音節を⁵⁶ 具えた第二十五原理である⁵⁷ プルシャに至るであろう。
- (76) このように、サーンキヤとヨーガ、ヴェーダとアーラニヤカ⁵⁸、パンチャラートラは一つであり、それらは相互に部分となっている、と言われるのである。これが、専一に信仰する者たちのダルマであり、ナーラーヤナという最高神を本質としている⁵⁹。(Cf.MBh.XII.337.1)

⁴⁹hi dharma ekāntasevitaḥ Cp. ekāntasevitaḥ, ekāntibhir bhāgavataiḥ sevitaḥ / (ekāntasevitaḥとは、ekāntibhiḥ 専一の信仰者たちによって、すなわち、パーガヴァタたちによって、sevitaḥ 実行された、という意味である)

⁵⁰nārāyaṇātmake mokṣe Cp. sāmkyayogayor api mokṣa eva phalaṁ, sa ca nārāyaṇātmakaḥ / (サーンキヤ・ヨーガにおいても果報は解脱である。そしてその解脱は、nārāyaṇātmakaḥ ナーラーヤナを本質としている、という意味である)

⁵¹P. mānuṣaṁ samabhiplutam B.,K.: mānasaṁ samabhiplutam

⁵²P.,K.: devāś ca ṛṣayaḥ B. devā ṛṣayaś ca Sandhi irregular: devāś ca ṛṣayaḥ Cf.Oberlies[Grammar]: 1.1.2. Absence of praśliṣṭa-sandhi, 1.1.2.3 -a/ā ṛ-, p.9.12.

⁵³vaikārikāḥ Cn. vaikārikāḥ, sāttvikāhamkārajāḥ / (vaikārikāḥとは、サットヴァ的な自我意識から生じた者たち、という意味である)(Cf.Sāmkyā-Kārikā 25, vaikārika-ahamkāra) Cv. prāyaśaḥ sattvagune eva ratāḥ / kadācid iśadvikārasahitavād vaikārikā ity ucyante / ((彼らは) 大抵はサットヴァ的性質においてのみ満足するが、時にはわずかな変化(?)を伴うために、vaikārikāḥと言われる)

⁵⁴gacchet puruṣaḥ puruṣottamam Cf.Matsubara[1994]: profound relationship between puruṣa and puruṣottama, in alliterative word play, p.79.13.

P. は一行詩であるが、B.,K. は次の1行(=MBh.XII.901*)を加えて二行詩にしている。

vada sarvaṁ yathādr̥ṣṭaṁ pravṛttiṁ ca yathākramam / (すべての行為を、見た通りに、順序通りに、お話し下さい。)

⁵⁵P. susūkṣmasattvasamyuktam B.,K.: susūkṣmaṁ tattvasamyuktam Cn. tattvena, anāropitena rūpeṇa samyuktam, adhiṣṭhānamātram / (tattvena, すなわち、仮託されたのではない姿と, samyuktam, すなわち、(その姿の)居場所にすぎない、という意味である)

⁵⁶tribhir akṣaraiḥ Cn. tribhir akṣaraiḥ, akārokāramakāraiḥ / (tribhir akṣaraiḥとは、ア・ウ・ム之音と、という意味である)

⁵⁷P. niṣkriyaḥ pañcaviṁśakam B. niṣkriyaḥ pañcaviṁśakaḥ K. niṣkriyaṁ pañcaviṁśakam

⁵⁸vedāraṇyakam eva ca Cn. vedāraṇyakam, jīvabrahmābhedaparaṁ tattvam asyādivākyajam jñānam / (vedāraṇyakam とは、自我とブラフマンの同一性を最高とする真理であり、その最初の文章より生じた知識である)

⁵⁹eṣa ekāntinām dharmo nārāyaṇaparātmakaḥ Cf.Matsubara[1994]: Nārāyaṇa and dharmo, p.130.5.

- (77) 海より発したもろもろの水の流れが、再びもとの海に入るように、王よ、これら知識の大きな水の流れは、再びナーラーヤナに入るのである⁶⁰。(韻律: Upajāti)
- (78) このようにそなたにサートヴァタのダルマが語られた、ヤドゥ族の親族よ⁶¹。できる限り、これを正しく実行せよ、バーラタ族よ。
- (79) このように大幸運のナーラダは、私の師に対して、白い人々と苦行者たちの⁶² 揺るぎない専一の道を語ったのである。
- (80) そしてヴィヤーサは、歡喜をもって、ダルマの息子(ユディシュティラ)に語った、英知ある者よ。それを師から伝えられて、私がそなたに語ったのである。
- (81) このようにこのダルマは行うのが難しい、最高の王よ。そなたであれ他の者であれ、惑乱した者たちが享受することはないのである⁶³。
- (82) クリシュナこそが、もろもろの世界の創造者であり、そして惑乱者である。帰滅を引き起こす者であり、そして(創造の)原因なのである、人々の王よ。

[337 章] (B.349 章, C.13637-13712, K.359 章) (ナーラーヤナ章 (17) パンチャラートラ)

ジャナメージャヤは言った。

- (1) サーンキヤ、ヨーガ、パンチャラートラ、ヴェーダとアーラニヤカ (vedāraṇyakam)、これらの知識が、梵仙よ、世間の人々の間に広まっています。(Cf.MBh.XII.336.76)
- (2) これらは、同一の基盤 (niṣṭhā) をもつのですか、あるいはそれぞれ異なる基盤をもつのですか、聖者よ。私に問われたあなたはお話し下さい。そして行為 (pravṛtti) についても順序に従って (お話し下さい)⁶⁴。

ヴァイシャンパーヤナは言った。

- (3) ガンダヴァティーは⁶⁵ パラーシャラから、多くの知恵をもち、大変にすぐれ、自制ある⁶⁶ 偉大な聖仙を、息子として、島の中で⁶⁷ 生んだ。この無知の闇を砕く聖仙 (ヴィヤーサ) に対して敬礼する。(韻律: Upajāti)

⁶⁰Deussen は、この詩節に関連して、Chānd.Up.6.10.1 の参照を指示している。(p.848, v.83)

⁶¹P.,K.: yadubāndhava B. kurunandana

⁶²śvetānām yatinām āha ekāntagatim avyayām Cn. śvetānām, grhasthādīnām, yatinām kāṣāya(vastra)dhāriṇām / (śvetānām とは、家長期などにいる者たちの、yatinām とは、褐色の衣を着た者たちの、という意味である) Ganguli: The word (śvetānām) may also mean the inhabitants of White Island, p.193, fn.1.

Sandhi irregular: āha ekāntagatim Cf.Oberlies[Grammar]: 1.1.2. Absence of praśliṣṭa-sandhi, 1.1.2.4 -a/ā e-, p.12.12.

⁶³P. na bhajanti vimohitāḥ B. bhavanti vimohitāḥ K. na bhajanti ca mohitāḥ

⁶⁴K. はこの詩節の後に次の 2 行を挿入している。

katham vaikāriko gacchet puruṣaḥ puruṣottamam /
vadasva tvaṃ mayā pṛstāḥ pravṛtīm ca yathākramam //

(変異の者は、どのようにして最高のプルシャに至ることができるのですか。

私に問われたあなたはお話し下さい。そして行為についても順序に従って (お話し下さい)。)

⁶⁵P. gandhavatī B.,K.: satyavatī

⁶⁶P.,K.: ātvavantam B. ātmayogāt

⁶⁷dvīpamadhye Cs. dvīpamadhye, yamunādvīpamadhye / (dvīpamadhye とは、ヤムナー川の島の中で、という意味である)

- (4) 人々は、(この聖仙は) 第一の父祖であり、聖なる輝きをもつ六番目の大仙であり⁶⁸、ナーラーヤナの部分から生じた唯一の息子として島で生まれ、ヴェーダの大きな蔵であると、語るのである。(韻律: Upajāti)
- (5) 原初の時代に (ādikāleṣu)、大きな輝きをもち、不生にして太古の⁶⁹ ナーラーヤナは、息子を得んとして (putrārtham) 力高揚して、ヴェーダの大きな蔵であり⁷⁰、高貴な輝きをもつ、かの偉大なヴィヤーサを創造した。(韻律: Upajāti⁷¹)

ジャンメージャヤは言った。

- (6) あなたはかつて出生についてお話になりました⁷²、最高の再生族よ。ヴァシシュタの息子がシャクティであり、シャクティの息子が⁷³ パラーシャラであると。
- (7) パラーシャラの息子 (dāyāda) が、聖者クリシュナ・ドヴァイパーヤナ (ヴィヤーサ) であると (お話になりました)。しかし今やあなたは、このヴィヤーサをナーラーヤナの息子であるとお話になります。
- (8) それでは、無限の輝きをもつヴィヤーサのかつての誕生は一体どうなるのですか。最上の思惟をもつ方よ、ナーラーヤナから生まれた誕生についてお話し下さい。

ヴァイシャンパーヤナは言った。

- (9) もろもろのヴェーダの意味を知りたいと願い、ダルマに通じ、苦行の蔵であり、知識に専心する我が師 (ヴィヤーサ) は、ヒマラヤの裾に住んでいた。
- (10) その時、彼に傾倒する我々は、パーラタ族物語を作成して、苦行に疲れた英知ある師から、教えを聞かんとしていたのである、王よ。

⁶⁸pitāmahādyam pravadanti śaṣṭham mahārṣim ārṣeyavibhūtiyuktam Ca. pitāmaho brahmā ādyo yasya vācikaputrasya tam / tathā na saṃgacchate / kecit pitāmahaśabdena nārāyaṇa ucyate ity āhuḥ / ((pitāmahādyam とは) pitāmahaḥ, すなわち、ブラフマー神は、ādyah, すなわち、言葉から生まれた息子の最初の者であり、彼を、という意である。このように一致しているのではない。ある人々は、pitāmaha 父祖の語によってナーラーヤナが言われていると言った。)

Cn. pitāmahasya ādyo nārāyaṇas tam, yaṃ śaṣṭham nārāyaṇāvātāram vadanti / pitāmahādyam ārabhya yaṃ śaṣṭham vadanti vā, yasmāt pitāmahād yaṃ śaṣṭham vadantīti vādhyāhṛtya yojyam / sarvathāpi pitāmahādyam ity ekaṃ padam / (pitāmaha 父祖の始まりは、ナーラーヤナである。彼を、六番目のナーラーヤナの権化である、と人々は言う。あるいは、彼を「父祖の第一」から始めて六番目である、と言う。あるいは、父祖から六番目であるもの、と人々は言う。以上を考慮して用いるべし。いずれにせよ、pitāmahādyam と一語である)

Cp. pitāmahāt, nārāyaṇāt / kṛṣṇadvaiṣṭhāyaṇam śaṣṭham / tathā hi, prathamam nārāyaṇas tato brahmā tato vasiṣṭhas tataḥ śaktis tataḥ parāśaras tato dvaiṣṭhāyaṇa iti / (pitāmahāt, すなわち、ナーラーヤナから、śaṣṭham 六番目は、クリシュナ・ドヴァイパーヤナである。すなわち、ナーラーヤナが第一、次にブラフマー神、次にヴァシシュタ、次にシャクティ、次にパラーシャラ、次にドヴァイパーヤナである。)

Cs. bhagavato vyāsasya brahmaṛṣiṃśāprabhavattvam eva sarve jānanti, na tu bhagavadbhavattvam ity āha / pitāmahādyam, yaṃ putram pitāmahād ārabhya nārāyaṇasya śaṣṭham – nārāyaṇo – brahmā – vasiṣṭhaḥ – śaktiḥ – parāśaro – vyāsa iti nārāyaṇaśaṣṭham / (至尊のヴィヤーサについて、梵仙の家系の威光を皆知っているが、しかし聖者の順序については知らないの(次のように) 言ったのである。pitāmahādyam とは、父祖から始めて、ナーラーヤナの六番目である息子を、すなわち、ナーラーヤナ、ブラフマー神、ヴァシシュタ、シャクティ、パラーシャラ、ヴィヤーサというように、ナーラーヤナの六番目を、という意味である)

Cs. ārṣeyavibhūtibhiḥ śamadamādibhiḥ / (ārṣeyavibhūtibhiḥとは、寂静と統御などによって、という意味である)

⁶⁹P. ajaḥ purāṇaḥ B.,K.: ajaṃ purāṇam

⁷⁰brahmamahānidhānam Cs. brahmaṇo vedasya manānidhānam ādhāraḥ / (brahmaṇaḥ, すなわち、ヴェーダの, mahānidhānam, すなわち、すなわち保持者である、という意味である)

⁷¹c 句のみ 10 音節からきている。

⁷²P.,K.: kathitaḥ pūrvaṃ saṃbhavo B. kathitaṃ pūrvaṃ saṃbhavo

⁷³P. śakteḥ putraḥ B.,K.: śaktiputraḥ

- (11) (我々とは) スマントウ, ジャイミニ, そして誓約堅固のパイラ, 四番目の弟子として私, そしてヴィヤーサの息子シュカである。(Cf.MBh.II.4.9, XII.314.24, 327.16)
- (12) これら五人の卓越した弟子たちに囲まれて, ヒマラヤの裾で, ヴィヤーサは輝いていた。あたかも妖怪たちによって囲まれた妖怪の主(シヴァ)のごとくに。
- (13) (ヴィヤーサは) もろもろのヴェーダを支分とともに, そしてパーラタ族の物語のさまざまな意味を, すべて繰り返し語った。心一つに集中し, 感官を制御した彼を, 我々は, 一心に敬ったのである。
- (14) そしてある話の折に, 我々は最高の再生族(ヴィヤーサ)に, もろもろのヴェーダの意味, もろもろのパーラタ族の物語の意味, そしてナーラーヤナからの(ヴィヤーサの)誕生について尋ねた。
- (15) 真理を知る彼ヴィヤーサは, まずもろもろのヴェーダの意味, もろもろのパーラタ族の物語の意味を話してから, ナーラーヤナからの誕生について語り始めた。
- (16) 「私が苦行によって知った, 原初の時代に起こった最高にして神聖な, そしてすぐれたこの物語を, バラモンたちよ, 聞くがよい。
- (17) 浄不浄を離れた大ヨーガ行者ナーラーヤナは⁷⁴, 蓮より生まれた第七の生き物の創造に至った時,
- (18) 息子を, すなわち, 無限の光をもつブラフマー神を⁷⁵, 臍から創造した。そしてブラフマー神が姿を現わすと, 彼に次の言葉を語った。
- (19) 『そなたは, 私の臍から生まれた, 生類の創造を行う威力ある者である。ブラフマー神よ, 賢愚ともども種々の生類を創造せよ。』
- (20) ブラフマー神はこのように言われて, うつむいて, 不安に満ちた心をもって, 恩寵を与える神である自在神ハりに頭を下げて言った。
- (21) 『私に生き物たちを創造するためのいかなる力があるのですか, 神の支配者よ。あなたに敬礼いたします。私には智慧 (prajñā) がありません。何か次にすべきことをお命じ下さい。』
- (22) このように言われた至尊者は, そこで姿を隠した。そして英知ある者たちの中で卓越した, 神の支配者たる彼は女神「英知」(buddhi)を思った。
- (23) すると「英知」は, 自分の姿をとって, 威力あるハりに近づいた。その時, ヨーガにすぐれたハりは, ヨーガ(の力)によって自ら「英知」を縛った⁷⁶。

⁷⁴nārāyaṇo mahāyogī Cf.Hopkins[1901]: *mahāyogin*, p.365.9.

⁷⁵P. putraṃ brahmāṇam amitaprabham B.,K.: pūrvaṃ brahmāṇam amitaprabhaḥ

⁷⁶yogena cainām niryoḡaḥ svayaṃ niyuyuje tadā Cs. durghatān api padārthān yojayati, ghatayati yogoḥ śaktiviśeṣaḥ, tena niryoḡaḥ, svayaṃ yogarahito 'bhavad ity arthaḥ / (作るのが困難なもろもろの言葉の対象を, yojayati, すなわち, 形成する, のが, yoga であり, それは特別な力である。従って niryoḡaḥとは, svayaṃ 自らはヨーガ(の力)を欠いていた, という意味である) Cf.Hopkins[1901]: *niryoḡa*, the remarkable phrase, meaning superior to *yoga*, p.360.15.

- (24) 不変にして力強き神ハリは、自在のヨーガに専念し⁷⁷、力あり、誠実な「英知」に(次の)言葉を発した。
- (25) 『世界の創造という目的を達成するため、ブラフマー神に入れ』と。すると自在神に指示された女神「英知」はすぐにブラフマー神に入った。
- (26) そこでハリは、この者(ブラフマー神)が再び「英知」と結びついたのを見た。そしてもう一度彼に「これら様々の生き物を創造せよ」と言葉を発した⁷⁸。
- (27) このように言って、かの至尊者はその場で姿を消した。そして瞬く間に神と呼ばれる(にふさわしい)自分の場所に⁷⁹至った。
- (28) (ハリは、その本来の状態 (prakṛti) に達して、唯一者となった。するとその時、ハリにはまた別の考え (buddhi) が生じた。
- (29) 「最高の神ブラフマーによって、ダイトヤ、ダーナヴァ、ガンダルヴァ、羅刹の群に満ちた、これらすべての生き物たちが創造された⁸⁰。実にこの大地は(生き物の)重荷に圧迫され苦しむようになった。
- (30) 数多くのダイトヤ、ダーナヴァ、羅刹たちが地上において力をもち、苦行を行って、もろもろの最高の恩恵を (varān) 得るであろう。
- (31) これらすべての者たちは、恩恵の授与によって必ずや自惚れるので、神々の群や苦行に富む聖仙たちは悩まされるであろう。それゆえ、余が(大地の)重荷を降ろすのが適当である。
- (32) そこで、順序よく、(余が)地上に種々の姿で出現することによって、罪人たちに対する処罰と、善人たちに対する好意を通して(重荷を降ろすのが適当である)。
- (33) 余は、この哀れで誠実な大地を支えるであろう⁸¹。余は、地下界に住む蛇となって⁸²この大地を支えるのである。
- (34) 余が支える大地は、動くもの動かぬものからなる世界を⁸³支えるであろう。それゆえ、余は(世に)出現して、大地を守るであろう。」
- (35) かの至尊者マドゥスーダナは、このように考えて、顕現を生ずるために⁸⁴、多くの姿を創造した。

⁷⁷ aiśvaryayogasthaṃ buddhiṃ Cf. Hopkins[1901]: *aiśvarayoga*, the equivalent of the *yoga-aiçvara* of BhG.11.8, p.360.21.

⁷⁸ B.,K. は、この詩節の後に次の1行を挿入している。(=MBh.XII.902*)

bāḍham ity eva kṛtvā 'sau yathājñāṃ śirasā hareḥ /
(彼は「承知しました」と言って、恭しくハリの命令に従った。)

⁷⁹ P. svasthānaṃ B. saṃsthānaṃ K. svaṃ sthānaṃ

⁸⁰ P. sṛṣṭā imāḥ prajāḥ sarvā B.,K.: sṛṣṭāḥ prajā imāḥ sarvā

⁸¹ P. imāṃ tapasvinīm satyāṃ dhārayiṣyāmi medinīm / B.,K.: iyaṃ tapasvinī satyā dhārayiṣyati medinī Cs. tapasvinīm, saṃtāpavatīm / (tapasvinīm とは、苦しみをもち、という意味である)

⁸² pātālasthena bhoginā Cs. pātālasthena bhoginā, anantarūpeṇa / (pātālasthena bhoginā とは、アナンタの姿によって、という意味である)

⁸³ P. jagad dhi sacarācaram B.,K.: jagad viśvaṃ carācaram

⁸⁴ P.,K.: prādurbhāvabhavāya B. prādurbhāve bhavāya

- (36) 猪, ナラシンハ, 小人, そして人(という多くの姿を創造した)。「余はこれらによって, 邪悪な神々の敵どもを倒さねばならない」と考えた。
- (37) その時, 世界創造者(ブラフマー神)はさらに「ポー」という音を響かせつつ⁸⁵, 言葉(sarasvatī)を発した。そのときサーラスヴァタ(ヴィヤーサ)が生じた⁸⁶。
- (38) 彼(サーラスヴァタ)は, アパーンタラタマス(内面の闇なき者)という名をもち⁸⁷, 遍在者の⁸⁸言葉より生じた, 過去・現在・未来を知り, 真実を語る誓約堅固な息子である。
- (39) 不動の神々の始祖(ナーラーヤナ)は, 頭を下げた彼に言った。「思慮ある者たちの中ですぐれた者よ, そなたはヴェーダの物語に耳を傾けよ⁸⁹。それから, 余に命じられた通りにこの言葉を実行せよ, 聖者よ」。
- (40) かくしてマヌ・スヴァーヤムブバの時代に, ヴェーダは彼によって分割されたのである(bhinnās)。そこで至尊のハリは, 彼のこの行為に満足した。またよく実行された苦行にも, 禁戒にも勸戒にも(満足した)。

至尊者は言った⁹⁰。

- (41) もろもろのマヌの時代において, 息子よ, そなたはこのように世界を動かす者である⁹¹。バラモンよ, そなたは不動となり永久に危害を加えられることはないであろう。
- (42) またカリ・ユガ期になると(tisye ca samprāpte), クルという名のバーラタ族が(そなたから生まれ), 偉大な王たちとして地上で繁栄するであろう。
- (43) これらそなたより生じた者たちに, そなたを除外して⁹², 互いを滅するために, 家系の分裂(kulabheda)が生じるであろう, 最高の再生族よ。
- (44) そこでもまた, そなたは, 苦行に従事し, もろもろのヴェーダを種々に分けるであろう。黒いユガ期が到来したので, そなたは黒色の者となるであろう。

⁸⁵bhoḥśabdenānūnādayan Cs. bhoḥśabdena sarasvatīm ājuhāv ity arthaḥ / (ポーという音声によって, サラスパティーに供物を捧げた, という意味である)

⁸⁶tatra sārāvato bhavat Cf. Hopkins[Epic Mythology]: Vyāsa Kṛṣṇa, born of the word of God in Brahman's seventh creation, p.216, fn.1.

⁸⁷apāntaratamā nāma Ca. apāntaratamā iti janmāntare vyāsanāma / (apāntaratamas とは, 別の誕生におけるヴィヤーサの名前である) Cs. apāgatam āntaram tamo yasmāt / (内面の暗闇が去った者から, という意味である) Cv. avā[pā]ntaratama ity api bhagavata eva ekaṃ rūpaṃ, ādināryānāj jātam / paramātmā / (apāntaratamas とは, 至尊者の一つの姿である。最初のナーラーヤナから生じたもので, 最高のアートマンである)

⁸⁸p. vibhoḥ B. prabhūḥ K. prabhoḥ

⁸⁹vedākhyāne śrutiḥ kāryā tvayā Cs. vedākhyānaśrutiḥ, vedādhyayananimite śrutiḥ, śākhā, kāryā prāṇinām adhyayana-saukaryārtham / samkīrṇānām ṛgyajuḥsāmnām vyāsaṃ kurv ity arthaḥ / (vedākhyānaśrutiḥ, すなわち, ヴェーダ学習のためのśrutiḥ 聖典とは, 支分である。それが, 人々の学習を容易にするために, kāryā 作られるべし。すなわち, 混ざりあった(もろもろのヴェーダに), 讃歌・祭詞・歌詠の区分を作るべし, という意味である) Ganguli: *Vedākhyāne śrutiḥ* literally, I think, means thou shouldst turn thy ears to the description of the Vedas, implying that thou shouldst set thyself to a distribution or arrangement of the Vedic hymns and Mantras, p.196, fn.2. Deussen: *der Mitteilung des Veda [durch mich] sollst du dein Ohr leihen*, p.853, v.41. Esnouf[1979]: tu dois composer la Révélation pour communiquer les Veda, p.212, v.41.

⁹⁰B.,K. には śrībhagavān uvāca の語はない。

⁹¹P.,K.: tvam evaṃ lokapravartakaḥ B. tvam evam eva pravartakaḥ Cs. lokapravartakaḥ, lokyate nena dharma iti loko vedas tasya pravartakaḥ / (lokapravartakaḥとは, それによってダルマが見られるのが, lokaḥ 世界である。それはヴェーダであり, その(ヴェーダの) pravartakaḥ 創造者である, という意味である)

⁹²tvām rte Cs. tvām rte, tvadvākyam anādṛtyety arthaḥ / (tvām rte とは, そなたのことばを意に介さずに, という意味である)

- (45) (そこで) そなたは、さまざまなダルマの創造者、知識の創造者となるであろう。そなたは苦行に富む者となるが、欲望からは解放されないであろう⁹³。
- (46) そなたの息子は、大自在神の恩寵によって、欲望を離れ、最高のアートマン⁹⁴となるであろう。この言葉が違えることはない。
- (47) 人々が「祖父の心から生まれた (mānasa) 息子⁹⁵、最高の英知を備えた者、ヴァシシュタ、第一の者、苦行の蔵」と呼ぶ者、そして太陽を超えて輝く者⁹⁶、(韻律: Upajāti)
- (48) その者の子孫にまた、パラージャラという名の光輝の大仙が生まれるであろう。最もすぐれたヴェーダの器、苦行に富み、苦行の住居であるパラージャラ、彼がそなたの父である。そなたは、父のところの少女において、少女を母胎として⁹⁷、その聖仙からの⁹⁸息子として生まれたのである。(韻律: Upajāti)
- (49) (そなたにとっては) 過去・現在・未来のあらゆることの疑問は断ち切られている⁹⁹。なぜならば、かつて過ぎ去った千のユガの経過、
- (50) それらのすべてを余が示すのを、苦行を身につけたそなたは見るであろうから。さらに(そなたは)(これからの) 幾千のユガの経過を見るであろう。
- (51) この世界で円盤を手にした、無始無終なる余を、聖者よ、余を瞑想することによって(そなたは見るであろう)。この言葉が違うことはない¹⁰⁰。
- (52) 太陽の息子シャナイシュチャラは¹⁰¹偉大なマヌとして生まれるであろう。その同じマヌの時代に、そなたは、余の恩寵によって、七人の聖仙の一団に続く者として¹⁰²生まれるであろう、愛児よ。このことに疑いはない¹⁰³。

⁹³na ca rāgād vimokṣyase Cs. rāgāt, saṃsārāt / (rāgāt とは、輪廻から、という意味である)

⁹⁴paramātmā Cs.v.: paramātmā, pare brahmaṇi (Cv. parame nārāyaṇe), ātmā cittaṃ, yasya / (paramātmā とは、ātmā、すなわち、心が、pare、すなわち、ブラフマンに (Cv. parame、すなわち、ナーラーヤナに) ある者は、という意味である)

⁹⁵P. putraṃ B.,K.: viprāḥ

⁹⁶P. yaś cāpi sūryaṃ vyatiricya bhāti B.,K.: yasyātisūryaṃ vyatiricyate bhāḥ

⁹⁷kānikagarbhaḥ pitṛkanyakāyāṃ Ca. pitṛkanyakāyāṃ, pitṛganakanyakāyāṃ / (pitṛkanyakāyāṃ とは、祖霊の一団の (?) 少女において、という意味である) Cs. kānīno garbhaḥ, adattāyāṃ utpannaḥ / pitṛkanyakāyāṃ yojanagandhāyāṃ / sā hi pūrvajanmani pitṛñāṃ mānāsī kanyā / (kānīno garbhaḥ 少女の胎児とは、未婚の女性に誕生した、という意味である。pitṛkanyakāyāṃ とは、一ヨーヅナの期間香る女性サトヤヴァティーにおいて、という意味である。なぜならば、彼女は、以前の誕生において、父たちの心より生まれた少女であったからである) Ganguli: a maiden residing in the house of her sire, p.196.35. Deussen: von einem deinem Vater hingebenden Mädchen, p.854, v.51. Esnouf[1979]: une jeune fille pourvue d'un père (mais sans époux), p.213, v.51. Cf.Hopkins[1915]: Vyāsa Kṛṣṇa, born of a virgin, p.216, fn.1.

⁹⁸tasmād ṛṣes Ca. tasmāt, parāśarāt / (tasmāt とは、パラージャラから、という意味である)

⁹⁹P.,B.: chinnaśarvārthasaṃśayaḥ K. jñānāṃ vetsyase gatim

¹⁰⁰B.,K. はこの詩節の後に次の 1 行を挿入している。(=MBh.XII.904*)

bhaviṣyati mahāsattva khyātīś cāpy atulā tava /

(そなたの名声もまた無比のものとなるであろう、大いなる者よ。)

¹⁰¹śanaiścaraḥ Ca. śanaiścaraḥ, śanaiścaraḥ / kalpāntare vā śanir eva bhavitā manur iti / (śanaiścaraḥ とは、シャナイシュチャラの兄弟は、という意味である。あるいは、別の劫でシャニ (土星) として生まれたマヌは、という意味である) Cv. śanaiḥ, ekasaptatimahāyugaparyantaṃ caratīti śanaiścaraḥ, vaivasvatamanuḥ / (ゆっくりと (śanaiḥ)、七十一の大ユガの経過を経た (caratī) ので śanaiḥcara と言われる。ヴィヴァスバットの息子のマヌである)

¹⁰²P. saptarṣigaṇapūrvakaḥ B.,K.: manvādigaṇapūrvakaḥ

¹⁰³B.,K. はこの後に次の 2 行を挿入している。(=MBh.XII.905*)

ヴィヤーサは言った。

- (53) このようにその時支配神は、サラスヴァティーの子、聖仙アパーンタラタマスに¹⁰⁴ 言葉をかけた後、「行け」と言った。
- (54) かくして私は、神ハリメーダスの恩寵によって、ハリの命令により、アパーンタラタマスという名前で誕生したのである。そして再び、よく知られたヴァシシュタ家系の息子として誕生したのである。
- (55) このように私は、ナーラーヤナの恩寵による、そしてナーラーヤナの部分として生まれた、私のかつての誕生について語った。
- (56) なぜならば、私がかつて最高の瞑想によって、極めて厳しい大苦行を行ったから（そのように生まれたの）である、思慮ある者たちの中ですぐれた者たちよ。
- (57) このように、息子たちよ、私は、信愛ある者たちに対する愛情から、そなたらが私に尋ねたことすべてを、すなわち、かつての誕生と将来の誕生とを、そなたらに語ったのである。

ヴァイシャンパーヤナは言った。

- (58) このように我々の師、汚れなき心をもつヴィヤーサのかつての誕生は、尋ねられた通りにそなたに語られたのである、王よ。さらに聞くがよい。
- (59) サーンキヤ、ヨーガ、パンチャラートラ、もろもろのヴェーダ、そしてパーシュパタ¹⁰⁵、これらの知識は、異なった思想であると知れ¹⁰⁶、王仙よ。
- (60) サーンキヤの創唱者は、かの最高の聖仙カピラであると言われる。太古のヒラニヤガルバがヨーガを知る者である。他の者ではない。
- (61) アパーンタラタマスこそがヴェーダの師であると言われる。ある人々は、今この聖仙をプラーチーナガルヴァと呼んでいる。
- (62) ウマーの夫、妖怪の主、美しい喉をもつ者 (śrīkaṅṭha)、そしてブラフマー神の息子である思慮深いシヴァは、このパーシュパタの知識を語った¹⁰⁷。

yat kiṃcid vidyate loke sarvaṃ tan madviceṣṭitam /

(この世にあるものはすべて余の行為である。)

anyo hy anyam cintayati svacchandaṃ vidadhāmy aham /

(他の者は(行為とは)別のことを考える。しかし余は自分の願望を実行するのである。)

¹⁰⁴sārasvatam ṛṣim apāntaratamaṃ apāntaratamaṃ は apāntaratamasam を、韻律のために簡略化したものか。 Deussen: Apāntaratama (sic!), p.855, v.58.

¹⁰⁵pañcarātram vedāḥ pāśupatam tathā Cf. 松原 [1995]: ヴィシュヌ派とシヴァ派の融和を図る立場に対し、サーンキヤ、ヨーガ、ヴェーダと併置してパンチャラートラとパーシュパタの教義を別扱いにしている場所もある。p.130.33.

¹⁰⁶viddhi nānāmatāni vai Cn. nānāmatāni, bhinnaprasthānāni / (nānāmatāni とは、異なった宗派の、という意味である)

Cs. nānāvidhapuruṣamatāni / praṇetṛbhedaḥ arthabheda ity arthaḥ / ((nānāmatāni とは) さまざまな人によって考えられた、という意味である。論者の相違によって意味は異なる、という意味である)

¹⁰⁷jñānam pāśupatam śivaḥ Cf.Gonda[1970]: Śiva, promulgating the Pāśupata doctrine, p.13.34.

- (63) 至尊者(ナーラーヤナ)は、自らパンチャラートラ全体の知者であり¹⁰⁸、これらの知識すべてにおいて(存在することが)見られるのである、すぐれた王よ。
- (64) 伝承によっても、知識によっても、威光あるナーラーヤナが頂点である¹⁰⁹。暗闇となった者たちは、ナーラーヤナをこのように知らないのである、人々の王よ。
- (65) 賢者たちは、かの聖仙ナーラーヤナこそが聖典作者であり¹¹⁰、頂点であると語り、そして、他のものは存在しない、と語るのである¹¹¹。
- (66) ハリは常に、疑いを断ち切ったすべての者の中に住む。論議の力によって疑いをもつ者たちに、マードヴァが住むことはない¹¹²。
- (67) パンチャラートラを知り、正しい順序に(従う行為に)専念し¹¹³、専一の状態に達した者たちは、ハリに入るのである、王よ。
- (68) サーンキヤとヨーガの両者は永遠である。すべてのヴェーダは悉く永遠である、王よ。ナーラーヤナは太古のこの世の一切である、とすべての聖仙によって言われている。(韻律: Upajāti)
- (69) 天空においてであれ、地上であれ、水たちの中であれ、もろもろの世界すべてにおいて生じる善悪の行為は¹¹⁴、いかなる行為もその聖仙(ナーラーヤナ)から¹¹⁵生じると知れ。(韻律: Upajāti¹¹⁶)

[338章]¹¹⁷(B.350章, C.13713-13739, K.360章)(ナーラーヤナ章(18)プルシャの数と性質)

ジャンメージャヤは言った。

- (1) パラモンよ、多数のプルシャが存在するのですか、あるいは唯一のプルシャが存在するのですか。そこでの最高のプルシャとは何ですか。あるいは世間では何がその源(yoni)であると言われるのですか。

ヴァイシャンパーヤナは言った。

- (2) サーンキヤ・ヨーガを考察する者たちにとっては、世界には多数のプルシャが存在する。彼らはプルシャが唯一であることを認めないのである、クル族の家系に生まれた者よ。

¹⁰⁸pañcarātrasya kṛtsnasya vettā tu bhagavān svayam Cf.Matsubara[1994]: Nārāyaṇa, the founder or the original teacher of Pañcarātra, pp.18.17, 128.30, quoted by Yāmuna, p.129.21; Gonda[1970]: bhagavān Nārāyaṇa, the promulgator and preceptor of the Pañcarātra, p.164, note 212.

¹⁰⁹niṣṭhā nārāyaṇaḥ prabhuḥ Cs. niṣṭhā, paraṃ pratipādyam / (niṣṭhā とは、最高と理解されるべきもの、という意味である) Cf.Matsubara[1994]: Nārāyaṇa, niṣṭhā of all āgamas and ajñānas, p.128.32.

¹¹⁰P.,K.: śāstrakartāraṃ B. śāstrakartāraḥ

¹¹¹P.,K.: nānyo 'stīti vādinaḥ B. nānyo 'stīti vaco mama

¹¹²sasamśayān hetubalān nādhyāvasatī mādhavaḥ Cn. hetubalāt, kutarkabalāt / (hetubalāt とは、悪しき論理の力によって、という意味である) Cf.Matsubara[1994]: the transcendent God cannot be an object of logical or philosophical investigation, p.71.24.

¹¹³yathākramaparāḥ Cp. yathākramaparāḥ, śāstrasamarpitakramenānuṣṭhātāraḥ / (yathākramaparāḥ とは、聖典に伝承された順序に従う者たちは、という意味である) Cs. yathoktapañcakālakramānuṣṭhāyinaḥ / (正しく述べられた五時の順序に従う者たちは、という意味である)

¹¹⁴subhāsubhaṃ karma samīritam N. samīritam vede vihitam (samīritam とは、ヴェーダに述べられた、という意味である)

¹¹⁵tasmād ṛṣeḥ Cn. tasmād ṛṣeḥ, nārāyaṇāt / (tasmād ṛṣeḥ とは、ナーラーヤナから、という意味である)

¹¹⁶b 句 (pravatate sarvalokeṣu kiṃcit) 第7音節 (lo) 短音となるべきところが長音となっている。

¹¹⁷この章には、Edgerton の英訳(部分訳, vv.1-3, 8, 21-25)がある。(Edgerton[1965], p.332)

- (3) 多数のプルシャには¹¹⁸ 単一の源があると言われる。そのように、グナを超えて遍在するそのプルシャについて説明するであろう¹¹⁹。
- (4) 無限の威力をもち、苦行に集中し、自らを制御した尊敬すべき最高の聖仙、師ヴィヤーサに敬礼した後に(説明するであろう)。
- (5) あらゆるヴェーダにおいて、天則そして真実であると説明されているこのプルシャ讃歌は¹²⁰、王よ、獅子のごとき聖仙(ヴィヤーサ)によって考察された。
- (6) カピラを始めとする聖仙たちは、主張と反論を通して¹²¹、内我の考察(adhyātmacintā)に基づいて、もろもろの聖典(śāstrāṇi)を述べたのである、バラタ族よ。
- (7) しかしヴィヤーサは簡潔にプルシャの唯一性を述べた。このことについて、無量光をもつ者の恩寵によって、私はそなたに語るであろう。
- (8) ここでもまた人々はこの古譚を語る。ブラフマー神と三眼の神シヴァとの対話を、人々の王よ。
- (9) 乳水からなる大海の真ん中に、黄金と同じ輝きをもつ、ヴァイジャヤンタと呼ばれる立派な山があった、王よ。
- (10) その時(ブラフマー)神は、光り輝く住居において¹²²、内我の道を¹²³一人で考察していたが、いつもヴァイジャヤンタ山を訪れていた。
- (11) そしてそこで、四つの顔をもつ英知ある彼(ブラフマー神)が座っている時に、額より生まれた息子、すなわち、かつてのヨーガ行者の王¹²⁴、三眼をもち威光あるシヴァが、偶然虚空を通してやって来た。
- (12) そして(シヴァは)すぐに空から山の頂に降り、喜んで(ブラフマー神の)前に進み、両足の元で恭しく挨拶した。
- (13) その時、両足の元にひれ伏したシヴァを見て、威光ある唯一の造物主は、左手で(シヴァを)立たせた。

¹¹⁸bahūnām puruṣāṇām Cn. puruṣāṇām, pūrṣu upādhiṣu vasatām / (puruṣāṇām とは、pūrṣu, すなわち、もろもろの限定の中に、住む者たちには、という意味である)

¹¹⁹taṃ puruṣaṃ viśvaṃ vyākhyāsyāmi guṇādhikam Ca. viśvaṃ, sarvādhiṣṭhātāram / (viśvaṃ とは、一切を支配する者である、という意味である)

¹²⁰P. puruṣasuktaṃ hi B.,K.: puruṣasūktam hi Cf.Matsubara[1994]: Nārāyaṇa, regarded as the author of the Puruṣa hymn, p.128.16.

¹²¹utsargenāpavādena ṛṣibhiḥ kapilādibhiḥ Cp. utsargeneti, utsargasiddhasya dehātmābhibhāvāsya apadārthatvaṃ kapilādisāstrapravṛttir ity arthaḥ / (utsargena とは、utsarga 通則として成立している、身体によるアートマンの征服は(?), (議論の)対象ではない。(このため)カピラなどによる聖典が誕生した、という意味である) Cs. svabhāvasiddho bhedabhrama utsargaḥ, tena kapilādibhir ātmano nānāvapratipādakāni śāstrāṇi kṛtāni / nānātvanirākaraṇam apavādaḥ / tena puruṣaikyapratipādakaṃ śāstram vyāsena kṛtam / (utsargaḥ とは、明らかでない相違について混乱である。このために、カピラなどによってアートマンの多数性を理解させるための聖典が作られた。多数性の否定が apavāda である。これによって、プルシャの唯一性を理解させるための聖典がヴィヤーサによって作られた) Sandhi irregular: apavādena ṛṣibhiḥ Cf.Oberlies[Grammar]: 1.1.2. Absence of praśliṣṭa-sandhi, 1.1.2.3 -a/ā ṛ-, p.9.12.

¹²²P. vairājasadane B.,K.: vairājasadanān(t) Ca. vairājam, merau brahmaṇaḥ sadanam / (vairājam とは、メール山中のブラフマー神の住居を、という意味である)

¹²³adhyātmagatim Cs. adhyātmagatim, ātmatattvanirṇayam / (adhyātmagatim とは、アートマンの真理の確定を、という意味である)

¹²⁴P. yogīśaḥ B.,K.: mahāyogī

(14) そして至尊者はこの久しぶりにやって来た息子に言った¹²⁵。「よく来た、汝長い腕をもつ者よ。そなたが余の近くに来たのは誠に幸いである。

(15) そなたのヴェーダ読誦と苦行はいつも正しく行われているのか。いつもそなたは恐ろしい苦行を行っている。それゆえ余は再びそなたに尋ねるのである。」

ルドラは言った。

(16) あなたの恩寵によって、至尊者よ、私のヴェーダ読誦と苦行は、正しく動揺なく行われています。そして、全世界の(ヴェーダ読誦と苦行も)同様であります。

(17) 私が至尊者に光り輝く住居でお会いしてから久しくなります。それゆえ、私はあなたの御足がしばしば訪れる¹²⁶ この山にやって来ました。

(18) あなたがこの寂しい場所に来たことに¹²⁷ 私の好奇心があります。なぜならばその理由は小さなものではないでしょうから、祖父よ。

(19) 一体どうして、あの、飢えも渴きもなく、神やアスラ、そして無量の輝きをもつ聖仙たちが住む立派な住居を、

(20) 常にガンダルヴァたちやアプサラスたちが訪れた立派な住居を出て、お一人でこの名山に来たのですか。

ブラフマー神は言った。

(21) 私はいつも名山ヴァイジャヤンタを訪れている。ここで心集中して、輝くプルシャを思量するのである。

ルドラは言った。

(22) ブラフマー神よ、多くのプルシャが自存者たる貴方によって創造されました。そして他の者たちも(創造されました)。しかし、ブラフマー神よ、(あなたの思量する)輝くプルシャは唯一なのですか。

(23) ブラフマー神よ、あなたが今思量している最高のプルシャとは誰ですか。私のこの疑問についてお話下さい。私の好奇心は大きいのです。

ブラフマー神は言った。

(24) 愛児よ、そなたが言った通り、プルシャは多数存在する。それはその通りである。しかし(唯一のプルシャは)超越的であり、(それらと)同様に見るべきでもない。¹²⁸。唯一のプルシャが(多数

¹²⁵B.,K. はこの行の後に pitāmaha uvāca を挿入している。

¹²⁶[vatpādasevitam Ganguli: that is now the abode of thy feet, p.199.38.; The abode of thy feet means thy abode, p.199, fn.1.

¹²⁷ekāntagamane te Esnoul[1979]: ta Voie de l'ekānta, p.218, v.19

¹²⁸evam etad atikrāntaṃ draṣṭavyaṃ naivam ity api Ca. evam etad iti / satyam uktam idaṃ tvayā yad bahavaḥ puruṣā iti / kiṃ tu atikrāntam, atikramarūpam idaṃ / tatraivaṃ na draṣṭavyam / (evam etad とは、プルシャは多数であると汝が述べたのは正しい。しかし、atikrāntam, すなわち、それは超越した姿をもっている、という、この点については、evam そのように、na draṣṭavyam 見なすことはできない、という意味である) Cs. atikrāntaṃ, vicāram antareṇaiva niśictam / (atikrāntam とは、吟味なしに決定された、という意味である) Cv. etat tvayoktaṃ puruṣabahutvaṃ, evaṃ bhavaty eva / etebhyaḥ atikrāntaṃ, atīśayitaṃ daivam api draṣṭavyam / (etat, すなわち、汝によって言われたプルシャの多数性は、evam その通りである。それらから atikrāntam, すなわち、超越した神聖な存在も見られるべきである) Edgerton[1965]: In a sense this is transcended, and in this (other) sense not transcended, too, p.332, v.24.

のプルシャの) 基盤 (ādhāra) であることについてそなたに語るであろう¹²⁹。

- (25) 多数のプルシャたちにとって、それ(唯一のプルシャ)は唯一の源であると言われる¹³⁰。そしてその、一切であり、最高であり、極めて大きな、グナなき永遠の(唯一の)プルシャに¹³¹、(多数のプルシャは)グナなき者となった後に、入るのである。

¹²⁹ādhāraṃ tu pravakṣyāmi ekasya puruṣasya te Sandhi irregular: *pravakṣyāmi ekasya* Oberlies[Grammar] の分類によれば, 1.1.3. Absence of *kṣaipra-sandhi* の, *-i e-*のケースに当たると思われるが, このケースへは言及はない。

¹³⁰bahūnāṃ puruṣāṇāṃ sa yathāikā yonir ucyate Ca. yoniḥ kāraṇam, ātmeccayā nānālīṅgaśārīranirmāṇadvārā / (yoniḥとは, 原因である。アートマンの願望によってさまざまな微細身を形成することを通して(原因である))

¹³¹taṃ puruṣaṃ paramaṃ sumahattamaṃ Cn. paramaṃ, sūtrātmanaṃ sumahattamaṃ kāraṇam / (paramaṃとは, 経糸我に, という意味であり, sumahattamaṃとは, (極大の)原因に, という意味である) Cf.Matsubara[1994]: the profound relationship between *puruṣa* and *puruṣottama*, indulging in alliterative word play, p.79.15.

(2019年 1月 4日 受付)
(2019年 3月 19日 受理)